いまある緑を残す

200年が息づく松戸・関さんの森

関邸入り口と
関美智子さん

「あきらめてはいけません。道路を作れば、二百年もの歳月が作ってくれた自然をあっという間になくしてしまいます。年間五千人ほどの人や子どもたちが緑を共有して、勉強や体験に来ています。この歳になって、自然をなくしてしまったら生きている甲斐がありませんね」

道路を作るなら自然と人が共生できるように

松戸市幸谷、新松戸駅から高台へ十分ほど、いきなり右手に、むつみ梅林の二六〇本の緑に出会う。その奥に関美智子・啓子さん姉妹の邸宅がある。

入り口の桜の老樹が見事に咲いた。

都市計画道路337号線が、写真左下のグラウンドを潰し、塀向こうの関邸に入り、庭を抜け、蔵を倒して梅林を通過する。この道路案は昭和39年に決定されているが、以後、関さんの代替案、市の暫定案のやり取りがあり、市では街路整備業務の予算案を上程した。

一・一ヘクタールの旧こどもの森（埼玉県生態系保護協会に寄付）、グラウンド、関邸の庭、梅林など二ヘクタールの里山緑地みんなひっくるめて森さんの緑、自然、森と言われる。この全体が自然観察、自然体験の貴重な場なのだ。年間五千人ほどの成人・子どもたち、障害・高齢者が利用している。「森さんの森を育む会」の会員がそれを支える。講師を招き、梅の選定講習会も軌道に乗っている。

緊迫の日が続くが、関さんの昔話を聞くのは、いつも楽しい。幸谷の地にご先祖が分家して、もう二百余年。七代目の当主は、馬橋の小学校まで小一時間かけて通い、小二で終戦。「この二百年がもったいない。道路を通してもいい、ただ自然を残した人も共生できるような…」

↑　グラウンド（立て札ではグランド）は、松戸市に貸し出している子どもの広場。広い芝生の手前では、ゲートボールのため整備していた。くっきりと影を落としているのは、高くなった南側の道に天を仰いで立つ、エノキ、クヌギ、コナラ、ケヤキの巨樹たち。エノキを食樹とするオオムラサキが育っていたと言う。

7月21日（月・海の日）13時から、流通経済大学新松戸キャンパス講堂で「関さんの森エコミュージアム記念シンポジウム」が開かれる。前日には関さんの庭で、そうめん流しなどを楽しむ。